

画像の窓からのぞく人体の宇宙

放射線科代表部長
久保田 潤

1. 放射線科はハブ

当院には、画像診断を専門に行う放射線科医＝「放射線診断専門医」がいます。CTやMRIを中心に、目的にあった検査計画を立て、技師や看護師とともに検査を行います。そして、得られた多数の画像から異常を拾い出し、症状や経過の情報などを加えて解釈し、画像診断報告書を主治医に届けます。すべての診療科の疾患を扱うので、それぞれの専門科の疾患の知識が蓄積され、それが他の科の疾患の診断にも役立ちます。放射線科は、すべての科の情報が集まり、すべての科へ情報を発信するハブ（車軸）の役目をしながら、病院全体の医療の質の向上を支えています。

2. 画像の窓から人体の宇宙をのぞく「画像診断」

近年の画像診断装置の技術は非常に発達していますが、人体は技術の進歩ほど急激に進化はしていません。より細かく大量の情報が得られるようになったとしても、その意味を知ることができなければ、それはただのデータにすぎません。

人体そのものへの深い理解や考察を背景に、画像を通して人体の中で起こっていることの意味を知ろうとすることが、「画像診断」の大切な姿勢だと思えます。



画像診断する放射線科医

3. 地域と画像診断

(1) 装置だけでなく、画像診断レポートを共有

近隣のかかりつけ医からの依頼により、CT、MRIの検査と画像診断を行っています。画像診断装置が地域で共有されていることは当然ですが、私たちがもっとも大切にしているのは、画像診断

報告書（レポート）が共有されていることです。

患者さんが放射線科で検査を受けると、画像とともに画像診断レポートがかかりつけ医のもとへ届けられます。当院へ入院し検査を受けると、それまでの画像診断レポートと比較することによって入院中の診療に利用されます。退院してかかりつけ医へ戻り、再び放射線科で検査を受けると、今度は入院中の画像診断レポートと比較することによってかかりつけ医での診療に役立てられます。

この繰り返しにより、診療所と当院との間に有機的な連携がはぐくまれます。

(2) 「画像・病理カンファレンス」

毎月定期的に、院内・院外の医師らと、画像・病理を中心に症例を検討する「画像・病理カンファレンス」（主催：放射線科・病理診断科）を行っています。約35年の歴史のある、おそらく群馬でもっとも歴史のある画像カンファレンスです。初診時の症状、かかりつけ医での診断と治療、紹介時の状態、当院での経過、画像診断での見解、手術時の所見、病理診断までの全過程を、全科の医師がそれぞれの視点から多角的に検討します。

病態への理解を深めるという目的の前では、研修医からベテランまで誰がどんな発言をしてもかまわない、“敷居が低くレベルの高い”、自由なスタイルをモットーとしています。活発な議論から多くの示唆が得られます。こうした丁寧な振り返りが、明日の診療を支える底力になっています。地域の先生方にも、紹介患者さんがテーマの時はもちろんそれ以外でも、ぜひ足を運んでくださいますよう、ご案内いたします。



画像・病理カンファレンス風景